



随
想

怪
談

高
山
修

新聞の広告欄をみる。百貨店の広告に「グッドインテリアセール」とある。なんのことかと思つて、ならべられた商品名をみると「パンブーカートン、フラワーカートン、ストロークッション、プリントフロッキーのれん」とある。「パンブーカートン」が「すだれ」であり、「フラワーカートン」が「花ござ」のことらしいとはわ

かつたが、あとはなんのことだかわからない。

「あなたのセンスにマッチしたソフトなタツチの××製品」「ゴージャスなセンスを生かしたリゾートウェア」「コットン製品がフルに活躍するサマーシーズン」「クッキンゲアアイデアをセットした××のご贈答箱」など。十年ほどまえまではあまり見かけなかつた日本語——日本人が日本人のために使っているのだから日本語といつて差支えなからう——である。

こんな日本語を見慣れていると「東京・ギンザからヤングレディのみなさまに送つてきたおしゃれでコイキなビーチウェアコレクション」というような広告をみると、はて「コイキ」とは何語であつたか、英語にはなさそうだからフランス語なんだろう、ととんでもない想像をめぐらしたりする。

もともと外来語の多くは「ラジオ」や「ヒューマニズム」のごとく、外国からあたらしい事物や思想などを輸入したとき、自国のことばのうちそれに対応することばがなく、国語をもつては翻訳が大へん難し

い場合に生れるものである。それが、このごろでは「夏物大売出し」は「サマーバーゲンセール」に、「やわらかい肌ざわり」は「ソフトなタツチ」に化ける。名詞だけではなく、「ソフトな」「フルに」「ミックスする」など形容詞、動詞にまで英語がどんどん借用されている。

これはいったいどういふことなのか。うまれて消えてゆく泡のようにはかない流行語のことだからそう心配することもないという人もあるが、こんな化けものの外来語の滲透はなかなか根深いものがある。

食堂で「あつたかい牛乳をください」というと「ホットミルクですね」と念をおされる。「ごはん」というと「ライス」とくる。「つめたい水」というと、「アイス」の小犬の子は「アイスウォーター・ワン」と小犬のような潑らつきで声をはりあげる。なんだか田舎ものになつたような気になる。でも、これがニュージャパンのハイセンスにマッチしたスピーチハビットなのだろうか。

広告や食堂の女の子だけではない。テレビの座談会では、大学の先生までが「こ

いう問題は教育オンリーでは解決できません」と話しているし、料理の先生は「卵と牛乳をすばやくミックスいたして」と語るこんな例をあげればきりがない。ひとくちに言えば、イングリッシュユバージェンセルである。

おもしろいことだと言ってしまうはそれまでだが、よくよく考えてみると妙なことであり、重大なことである。「言葉だけの問題だからそうナーバスになることもないでしょう。それだけ日本人がインターナショナルなセンスを身につけてきたしじゃないですか」とこともなげにおっしゃる先生もあるけれど、その「言葉だけの問題」と考えるところに問題があるのではなからうか。

思考と言語との関係はもともと品物と包紙の関係のようなものではない。言語なしに思考は成立しない。言語を大切はすることなしにすぐれた文化は生れない。

もちろん、日本語が変化してはいけないというのではない。今日のような大きな変動期にあって日本語が変るのは当然である。しかし、「やわらかい」が「ソフト」

に、「すだれ」が「バンブーカーテン」に化けることによって、なんだか新しいものが生まれてきたような錯覚におちいることはおそろしいことである。新しい文化を生むためには、新しい言葉を生み出す努力を避けてはならない。陣痛なしに産みだされる化けもの的日本語の流行をわれわれはただ傍観しているだけでいいのだろうか。

よちよち歩きの子供が手をふりながら、「バイバイ」という。将来の言語史家はこの幼児語の誕生を第二次大戦の敗北が日本人の言語にもたらした変化の一例としてとらえるだろうが、戦後二十年ちかい今日の化けもの的日本語の流行をどうとらえるだろうか。

世の中が進歩したおかげで、一つ目小僧のような愛嬌のあるお化けにでなくなったが、もつとくせの悪いお化けが表通りを堂々と歩きまわり、茶の間に出没している。夢の超特急とか高速道路に熱をあげ、人づくりを説くのもいいけれど、早くお化け退治をやらなないとへんてこな文化国家ができるのであるまいか。

(女子大助教授・英文学)

「大津絵」への警告

片桐修三

かつて私は重久篤太郎兄のすすめによって「L・L」誌上に、同志社の英文学科在学中に柳宗悦先生の講義をきいたことを書いたが、私は学校を出てからも、先生には随分お世話になり、御指導をうけた。ことに先生と私を結びつけたのは「大津絵」を通してであった。何時だったか、先生が「大津絵が漸次世人に広く理解され、海外にまで、もてはやされるようになったのは結構なことだが、偽物が外国へ流れ出るのは困ったことだ」と嘆かれたことがある。私も好きなところから、勉めて所蔵者に乞うて大津絵を拝見するようにしているが、いわゆる偽筆に時々出合うことがある。大津絵は偽物が作りやすい上に、市場価値が高くなってゆくからであろう。もつとも既に大正十五年に、山村耕花氏が「大津絵の味」と題する大津絵解説文中で、その偽筆の見分け方を述べておられるのであるが、ここで「大津絵の偽筆」というのは「現在新ら

たに書いておきながら、あたかも古い大津絵のごとく見せかけた絵」をいうのであって、もちろん今後の大津絵にはならない。複製ならば複製であることを断わるべきである。また、禿氏祐祥氏は「大津絵と仏画」という文を書いて、吉川靈華氏が大津絵風の絵を書かれたことを記し、そのあとで、「吉川氏だけでなく大津絵を試みた画家は他にあるが、似て非なるものである」と断じておられるのである。この場合「似て非なるもの」という事は、「似ているが大津絵ではない」という事である。これは偽筆ではないが大津絵でもなく、強いていうならば、吉川氏が大津絵の伝承している画題によって書かれた絵は「吉川氏の大津絵」ということになる。とすると「大津絵師が書いた大津絵でなければ大津絵でない」ということになってきて、これは当然のことである。

ところが問題はこれで終らず「自称、大津絵師が書いた大津絵は如何」という問いが残っている。もちろん、これは自称大津絵師の大津絵なのであって、この自称大津絵師をも、大津絵師と認めるか否かによって

その書かれたものが大津絵であるか否かが定まることになる。ところが既にこういう「大津絵」が現在の「大津絵」として、世間にまかり通っているのである。そしていつの間にか世間はこれを書く人を大津絵師と認めている。私はこれを非難しようとは思わないが、ただ良い絵を書いてほしいと願うのみである。また机上でこんな理屈をこねて面白がっているのではない。かかる問題を考えねばならないような状況になってきたのである。「大津絵」とはどういうものかを、改めて反省しなおさねばならぬのではないか。かかる問題が起るのは大津絵というもの、持つ性格からくるものであって、ことに大津絵の歴史からいえば末期——それは江戸時代の末期でもあるのだが——において、大津絵師たち自体が大津絵画風の伝統を破って、めい／＼勝手に自分の画風を誇示しようとし、個人画家的な性格の絵師になったことに原因するのだと思われる。そして幸か不幸か、従来から大津絵によって採用されている画題や図柄によって絵をわけばそれが「大津絵」だと思われるようなことになってしまったのだが、これがま

た、今日の大津絵の支えとなっているのである。今後、新しく「大津絵」を生み出そうとすれば、余程の困難が横たわっていることを覚悟せねばなるまい。

(校友・民芸研究者)

「トリオ」と「同志」

畝 目 襄 治

「トリオで行こう」とか「トリオ・ロス・〇〇」とか、近頃のマス・コミ、コマーシャルのことばであるが、わが同志社こそ、真に「トリオ」をもって任じなければなるまい。

「三人寄れば文珠の智慧」という諺がある。物的には、写真機などを支える三脚というものがある。これらは、いづれも「トリオで行」っている例であるが、よく考えてみると、なかなか意味深い。これらの例は「トリオ」というもののもつ意味を端的に示しているといえよう。このように、三つのものの呼吸がピッタリ合っていることが、何かにつけて重要なことである。

同志社と「トリオ」との関係は実に密接である。

キリスト教の真髄に「父・子・御霊」の「三位一体」というものがある。同志社の校章はいうまでもなく「智・徳・体」の三者合一、調和を徴している。これは昔からよくいわれる「智・情・意」「真・善・美」ということばに、なお独特の具体的な理想を表わしている。

同志社設立の折には、三人の偉丈夫のタイアップがあり、また同志社の学問的基礎も、三人の優れた先生によつて定まつたということである。

✕

「トリオ」ということばは、同志社の「同志」ということばに通ずるように思われる。三つのものが共通の理想を目指して協同し、融合して行くのが、まさに「同志」ではないかと思う。

しかし、それは単に慣れ合いによるものであつてはなるまい。意見の相異があるような場合、ただ相手に妥協したり、問題を回避したり、また漠然と両方の意見を大まかに総合させたりというだけでは、真の意

志統一ができたとはいえず、真に和合できたとはいえない。

✕

学内、学外を問わず、直接的にも、間接的にも聞く話であるが、同志社が何となく冷たい、水くさいという評がある。これはキリスト教ヒューマニズムをもつて住ざるわが学園において、ゆゆしき大問題である。

同志社における自由主義・平等主義が、個人主義から勝手主義、割切り主義、事務処理主義になつていくらしいはあるまいか。キリスト教が観念的に説かれすぎ、具体的な実践や社会的連帯感に乏しいということにも関連するのではあるまいか。そしてそれは「同志」という意識の欠如によるものではなからうか。

✕

以上のことは、一面の感想にすぎぬかも知れぬが、もっと「同志」のことばの持つ意味から発想することが、この際必要ではあるまいかと感ずる次第である。

(中学校教諭・国語)

趣味は幾万ありとても

平 岩 士 郎

去る七月中旬、京都金鱗会から第一回研究展示会の招待状が来ました。金鱗会が、クラんちゅうク(金魚)の研究会だと言つたら、アツと驚く人があると思います。それは私が余りあれこれと好きなのが多すぎて「また気が変つたのか」と思う人、「どうする気なのか」と興味を持つ人、「かまわんのかいな」と心配して呉れる人、から見れば本当は困つた人間なのだからです。しかしながら本人にして見れば丸で少年のように生甲斐を感じて、ともすれば老廃に向う精神を一気に吹き飛ばし、初夏の涼しい毎朝の餌やりから日曜ごとの水替えに汗を流しているのだから結構勝手なものなのです。

昨日、学内で田畑先生にバッタリお逢いしたら「バラはまだ作つてられますか」と聞かれました。いつも「肥えられたですな」と言われて月給泥棒のように思われているのやないかと卑下してばかりおりました

が、やっと花のことを聞いて頂いてホッとしましたが、実はそのバラが昨今はいったって寂しいのです。

花はやはりバラだなといつも季節になるとその美しい容姿や色彩の巧緻さに満足させて貰いながら一本枯れ、二本倒れして、漸くわが家では約二十本位で余命をくい止めています。バラ作り十年にして今年ほどいい花が咲いたことも少く、また、今年ほどいい新芽の立った事も珍らしく思いました。バラ会だ、展示会だと勢い立っていた頃は、一等入賞確実の花は一輪も咲かず、漸く忘れ勝ちな頃になると咲く、欲心がなくなっただけで見る目が成長したので、しょう。皮肉なものです。

「お蔭様で今年はいいい花が咲いてくれました」と田畑先生に最敬礼している私でした。春の花からバラが終って六月の雨の中で咲く花菖蒲の頃は私の幸福はそれ以上無しと思うほど有難さを身辺に感じます。

五月、六月はいい季節ですね。

秋の花をお好きな方も沢山ありますが、私の家の秋の花はさっぱりです。と言いますのは、秋はそれ、ラグビーです。日曜こ

とに観戦に出て行きますのでほとんど九月以後の日曜は家にいないためでしょう。

ラグビーはいいですな。語れば際限がありません。それにしても年賀状に大学ラグビーの姿を紹介するのはもう鼻について来たらしたのでこれもやめた方がよいでしょう。同大ラグビーファンとして無上の光榮、全国征覇日本第一位の慶びを創部五十年振りでかみしめさせて呉れたんですから、もう言うことがありません。けれど「まだ見に行くのかいな」と私の奥さんに言われても、黙っついていそいと試合ごとのグラウンドの芝生に腰をすえているであろう私の姿を御想像下さい。

ラグビーのみな口あけて駈り来る

ラグビーが飯より好きな川柳作家がまだ一度もラグビーを句に発表していないのに、俳句の世界では新しい季題としてラグビーが詠われて来たのを知った時、全く「してやられた」くやしさに舌を巻きました。

この時こそ、俳句に負けるものかと角帽作家も川柳ラグビーを作りましたが、今日一句も胸に残る句がありません。前句「みな口あけて駈り来る」が妙に忘れられず、い

まだにラグビーの句の中では印象強い句となっています。

現代川柳誌馬(8)号中より、私で大体かみしめられる句を二、三紹介しましょう。

ヒロシマの孤児が吊る勳章がない

河野 春三

灰皿の中の姿と見ればよし

林田 馬行

欠伸終らんとするときおそいくる孤立

堀 豊次

同志社川柳会が生れる日を待つこと久しいです。

「これでは本職に身が入っていないではないか」と同志社の上司からにらまれている事と思います。しかし決してこのために給料を上げてくれなんて申し上げはいたしません。むしろ日常の生活には緊張と誇りを感じます。いわゆるファイトが出るのですからお見のがし下さい。ただ皆様がこれから色々好きなことを始められるなら「奥さんがウルサイ」事だけ御注意下さるようにと申し上げ、「趣味は幾方ありとて……」と叫びながら楽しんで頂きたいと存じます。

(文学部事務長)